

# Newsletter

Jun. 2004

<http://www.aack.or.jp>

目次

黄河源流

福寛 義宏 …… 1

秘境の最高峰—ルオニイ峰

平井 一正 …… 3

ウエストバットレスからの  
マッキンリー登頂

睦好 正治 …… 6

憧れのジョン・ミアー・トレール  
を歩く

阪本 公一 …… 10

オツルミズ沢

高尾 文雄 …… 12

追悼

「さよなら」藤平

舟橋 明賢 …… 14

藤平さんを悼む

平井 一正 …… 14

梅里雪山峰の二〇〇三年  
収容作業報告

吹田啓一郎 …… 15

計報

…………… 16

編集後記

…………… 16

## 黄河の源流

福寛 義宏

黄河の源流がチベット高原にあることは会員諸兄に良く知られていることであろう。そもそも、チベット高原はヒマラヤの北、東西二千、南北一千キロmに広がる、標高四千〜五千mのテーブル上の高原です。北緯二七度から三七度の中緯度に位置してはいますが、標高が高いため土壌は凍っていて、夏の間だけ凍土が融解します。湿地には凍結土に特有の凸凹した谷地坊主を見かけますが、多くは地面にまばらに草が生えているだけです。山裾の草が多いところでは、ヤクの放牧が行われています。氷河が多いように思われるかもしれませんが、氷河の分布は高原内の最北に連なる昆崙(クンロン)山脈から、中央部の唐古拉(タンラ)山脈、南の念青唐古拉(ニンチェンタンラ)山脈などの六千m以上の山岳地に限られています。ラサまでは航空機で訪れる人が多いようですが、蘭州から西寧(シーニン)、ゴルムドまで列車で行き、ゴルムドからラサまで、チベット高原を北から南に横断する青藏公路やラサから成都までの自動車道路が完成していま

す。青藏公路が昆崙を横切る峠は四、七六七m、唐古拉のそれは五、二三五mです。途中には軍の駐屯地や宿場町が散見されます。現在、列車でラサまで到達できるよう、青藏公路沿いに鉄道建設が計画されています。

永久凍土地域の建物や道路、鉄道建設には多くの難題があります。凍土が融解すると構造物が不等沈下するなど、土木・建築的な課題です。シベリア鉄道はこの問題を避けて、永久凍土帯の南縁に敷設されています。北緯六〇度の永久凍土帯にあるヤクーツク市に高層住宅が建てられるようになったのは、それほど以前ではありません。バム鉄道はバイカル湖の北側の凍土帯を通りますが、その完成も一九八〇年代の半ばになつてからです。

閑話休題。中国では東の沿岸部の経済発展に較べて西部の開発が遅々として進んでいないように思われるかも知れませんが、この青藏鐵路建設や天然ガス資源開発、水力発電計画など大型の開発が計画中には建設にかかっていますので、近い将来、様変わりが予想されます。

さて、黄河の源流部はチベット高原ですが、ブラマプトラ河の源、ヤルツアンポや長江の源、通天(トンチェン)河のように高原深く切れ込

んでいる訳ではなく、チベット高原の東北部に入り込んでいます。黄河は全域七五万平方キロと日本国土の約二倍の流域面積を持ちますが、降水量は年平均四六〇ミリ程度と少なく乾燥域です。その割には紀元前から文明が栄えるほど人口の多い状態が現在まで続いておりま。

甘肅省の省都、蘭州は標高千五百mにありま。この少し上流で、黄河本流以外に、大通（タートン）河、湟（ホワン）河という支流が合流します。大通河は祁連（チーレン）山脈の南側の雨水を集めます。また湟河は青海湖の東と北側の雨水を集め、大通河と並行して南東に流れています。黄河本流には蘭州の西約五〇キロの劉家峡ダムや青海湖の南にある竜羊峡ダムが設けられ、春先の洪水調節や水力発電用に貯水します。最近の話題は、ここ数年、ダムに流入する流量が減少していることです。劉家峡ダムから湖水を船で遡ると、巨大な炳靈寺石窟に達することができまが、二〇〇三年夏には水位が低いので近づけませんでした。

中国では、「南船北馬」と呼ばれるように、長江沿いには降水量が多く河川流量は豊富ですが、黄河沿いには少なく常に水不足の状態です。この状況を緩和するために、長江の河水を華北平原あるいは黄河へ引き入れる「南水北調」と呼ばれる大きな計画が進行中です。それも大きく三本のルートで水路が建設されます。東ルートでは、隋以来の大運河を使って天津に向かいます。中央ルートは武漢の北、漢江から華北平原山麓に沿って北京

へ向かいます。これらは黄河の下をトンネルで抜けます。西ルートはチベット高原部の長江源流から何本かの堤高二百m前後の大ダム群と長さ百キロメートル以上のトンネル群を必要とするので難工事が予想されます。

現在の黄河の年平均流量は六六〇億トン、長江のそれは九千五百億トンです。と言っても、黄河の実際の河川流量は、途中で灌漑用水や工業、都市用水として取水されますので、渤海へ流入する量はこれをはるかに下回りま。

さて、蘭州より上流です。昨年（二〇〇三年）夏、黄河の水利利用の実態を知るべく、西寧（シーニン）近くを見て回りました。西寧は青海省の省都で、標高二千二百mと高く、夏は涼しいので、多くの国内会議が夏に合わせて開催されます。回族が多数を占めていますので、中華風の装いをもったモスクが見えます。

まず、祁連山脈の南麓にある科学院の海北高寒草地生態系統実験場というところを訪ねました。ここへは西寧を流れる湟河から四kmの山脈を車で越えなければなりません。現在では三千八百m付近にトンネルが設けられ、道路も幅広く舗装もされているので快適です。トンネル付近の高度になれば、もうヤク放牧の世界です。と言っても、この一帯で見られるヤクはブータンやネパールで見かけられる自然のヤクよりも小振りで、ウシとの雑種かも知れません。トンネルを抜けると、正面に祁連山脈が迫ってきました。主峰の祁連山（五千五四七m）は遙か西で見えないの

ですが、正面のピークにだけ、白く輝く氷河が残っています。山の向こう側は一転して乾燥した河西回廊があるはずですが。眼を下に転じると、大通河と思われる川沿いに真黄色の湖が広がっているように錯覚しました。実は菜の花畑でしたが。その花畑の村、門源を通過して、しだいに高度を上げ、標高三千二四〇mの祁連山脈南西山麓に目的の試験場はありま。元は騎兵隊の基地であったそうですが、現在では、チベット高原の草地生態系を想定して、地球温暖化影響や紫外線量の生物への影響、過放牧対策の効果評価を調査課題としているそうです。祁連山脈はチベット高原とは別物と思っておりましたが、確かにチベット高原—青海湖—祁連山脈と繋がっているようにも見えます。夏でもあるので、放牧は祁連山脈の上の方まで展開されていて、下からでも白いテントが高密に散らばっています。過放牧の影響は栄養豊かなイネ科草本が減って、ヤクの好まないバラ科の金露梅という低木の群落が広がりつつあることのように見えます。「退耕還林還草」というスローガンが掲げられています。読んで字のごとく、耕作地限界高度を下げて、元の林や草地に戻そうという意味です。ヤク放牧地と菜の花やソバ等耕地の高度の折り合いは三千二百m付近と思われま。

翌日は、青海湖に向かいました。西寧からの高速道がほぼ完成に近く、三十四時間で青海湖に着きます。昔はチベット族にとって神聖な湖であった青海湖も、今や漢族の観光名所となっています。湖岸のチオルテンやはた

めくタルチョはネパールやブータンのそれと同じでも、ここ中国では観光客との棲み分けは難しそうで、はたして何時までチベット文化が生きながらえるのか、考えさせられます。青海湖は内陸閉鎖湖で流出口はありません。西寧から入ると、次第に高度を上げた後、日月山を右手に見て、広い砂地の流域境界を越え、ゆるやかに下ると青海湖(三千二百m)です。水はすこし塩辛い。周辺は、これも菜の花とソバ畑であり、ミツバチが飛び交っている。帰りは青海湖の東を北に向かいました。卓越風向は西風で、湖東部は青海湖の砂嘴から巻き上げられた砂が何列かの砂丘群となって東へ移動している。青海湖の東北に下ると湟源という町があり、名の通り湟河の源流です。西寧からの鉄路はここを通りジュンガル盆地のゴルドムに至る。周辺の緑の少なさは、必ずしも気候だけの影響ではないようです。その証拠に、鉄路に沿う山の斜面はポプラの植林をされていて、緑葉が見えます。翌日は青海湖への峠の手前で、道を南に取り、黄河源流の最奥ダム、竜羊峡ダムに向かった。チベット高原の東に連なる山々のはるか下、標高二千六百mの深い峡谷の中にそのダムはありました。二〇〇二年に完成した堤高一七八mの新しい大ダムですが、まだ一度も満水になつたことはないとの事。南水北調の西ルートを想定した計画のようです。

黄河流域はあまりに人の手が入っていて、その潜在植生が判りづらい。そのため、調査の度に、できるだけ近くの山へ入ることにしています。今回、西安市の南、秦嶺山脈にあ

る太白山(三千二六七m)を計画したので、出水で道路が荒れているとのことで、華山(二千一六七m)に変えました。山の肩(二千六五〇m)まではロープウェイを使っています。雄大な花崗岩の岩塔のような山ですが、人の多いのには驚きました。ちなみに、頂上近くの植生はコナラとマツにナナカマド、下層にはアザミを見つけました。

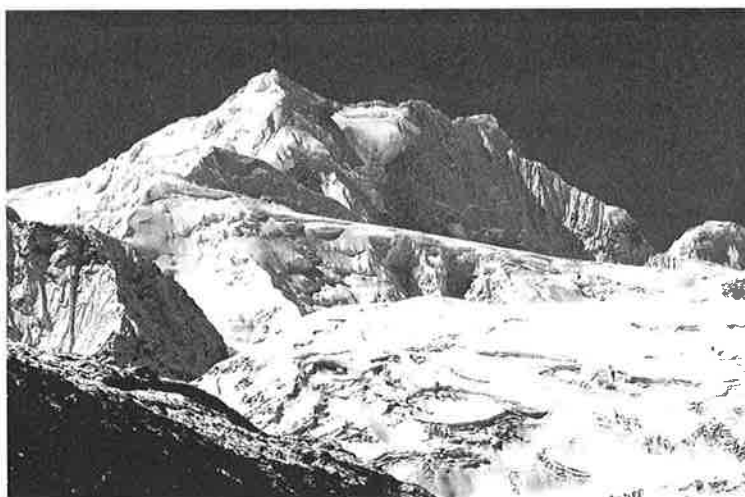
## 秘境の最高峰——ルオニイ峰

平井 一正

○三年秋、私は神戸大学登山隊を率いてチベットの秘峰ルオニイ峰(六八〇五m)に挑んだが、初登頂は成らなかった。簡単にその報告を書く。

はじめに

ルオニイ(若尼)峰——この山の名前を以前から知っている人は少ないだろう。は別名チヨムボ峰、バイリーガ峰ともいい、標高もまちまちであるが、ここでは六八〇五mとしておく。インド、ミャンマー、中国の国境にまたがるカンリガルポ山群の最高峰である。梅里雪山の西約二百キロメートルに位置し、ミャンマーの最高峰カカルポラジとは指呼の距離にある。この山は一九三三年にイギリスの探検家であり、植物学者であるキングドンウォードが南面からアプローチしてはじめて紹介した。彼の著書にはその写真があるが、以



ルオニイ峰 (6,805m)、コーギンから

後長年にわたってこの山域は、国境紛争もからみ、外国人の立ち入りを禁止され、この山も忘れ去られていた。私はこの山域の存在を一九八六年のクーラカンリ遠征のときに知った。誰も入ったことのない山域、長大な海洋性氷河が流れ、五、六千米の処女峰が屹立している・・・すべて私の胸をおどらせ、大きな夢として刻み込まれた。

神戸大学を停年後、私はこの山域の研究と許可取得努力を本格的にはじめた。九六年にはすでに、中国登山協会に登山の許可申請を

している。トレッキングの計画もたて、実現寸前までいったが、いずれも不許可となった。この地域の研究者中村保さんとの資料の交換をはじめたのもこの頃である。中村さんからはソ連製のこの地域の地図が岐阜の県立図書館にあるということなど、貴重な情報をいろいろと教えていただいた。そして一九九五年に中村さんははじめて北側からのルオニイ峰の写真を撮った。この写真ははじめての北側から撮ったもので、その美しい山に夢が再燃した。

政治的に困難な地域に入る許可取得には、いろいろな条件が必要である。情報収集のためのアンテナをのびし、国際関係に注目し、人脈をつくり、こちらの誠意と熱意をしめす、またかなり国際的センスが必要である。このような要素がうまくかみ合ったときに、幸運の女神はほほえんでくれる。くわしくは書かないが、このような努力の結果、ルオニイ峰の許可は中国登山協会から〇二年の二月に下りた。クーラカンリから十六年の年月が流れていた。そして登山時期を〇三年十月から十一月ときめた。そして〇二年十月、三名からなる偵察隊を派遣した。

### 隊の成立と準備

#### 一 隊の組織

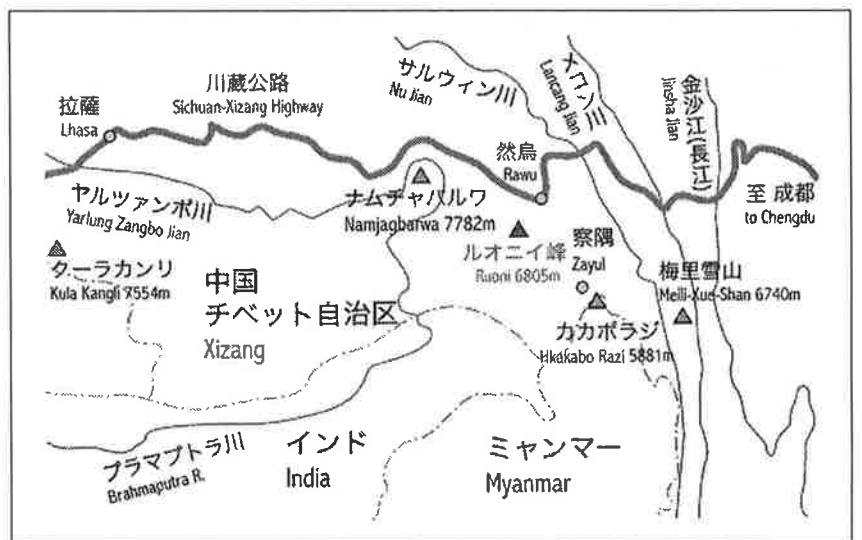
私はすでに七十歳をこえ、第一線にたつには年を取りすぎている。強力な登山隊長がいる。それは神戸大学医学部の北口博教授師において他はなかった。クーラカンリ、チェルー山でその力量はよく知っており、若い人の心もよくつかんでいる。

私は許可が下りる前から内々打診し、承諾を得ていた。北口は還暦一年前とはいえ、体は鋼鉄のように鍛えていて、現に山では強かった。次に肝心の若い人がいるか心配であった。若い人の価値観も変わり、海外登山への情熱も私が若いときは比較にならないくらい少ない。しかし北口はよく若者の心をつかみ、最終的に若い隊員が五人集まった。

#### 二 募金

特別許可料もからんで、隊員九名で予算は一二百万円と計上された。いまは海外登山は自費で行くべきであり、募金で行くべきでない、というのは常識になりつつある。それは重々わかっているが、若い人に高額な自己負担を要求すると、価値観の多様化もあって簡単に隊員辞退という結果になる。(ちなみにチヨゴリザでは五万円の負担金であった。大学での初任給の約四倍強とすると、今の八十万円強くらいか。それでもそう負担とは思わなかった。)私はなんとか募金をして若い人の負担を減らしたかった。しかしこの不況下で果たして企業は理解してくれるか、今回は現役の教授でもなく、企業に知人もない。いつもそうであるが、金が集まらなかつたらどうするか、眠れない夜が続いた。

〇三年一月から募金を開始した。一方、同窓会の先輩から同窓会誌を通じて卒業生によびかけたらどうかと提案してくれた。皆心配してくれた。断られた企業も多かったが、それなりに対応してくれた企業も多く、卒業生も大きな期待をもって寄付に応じてくれた。ありがたいことであった。募金は目標額に達



した。

### 三 SARS

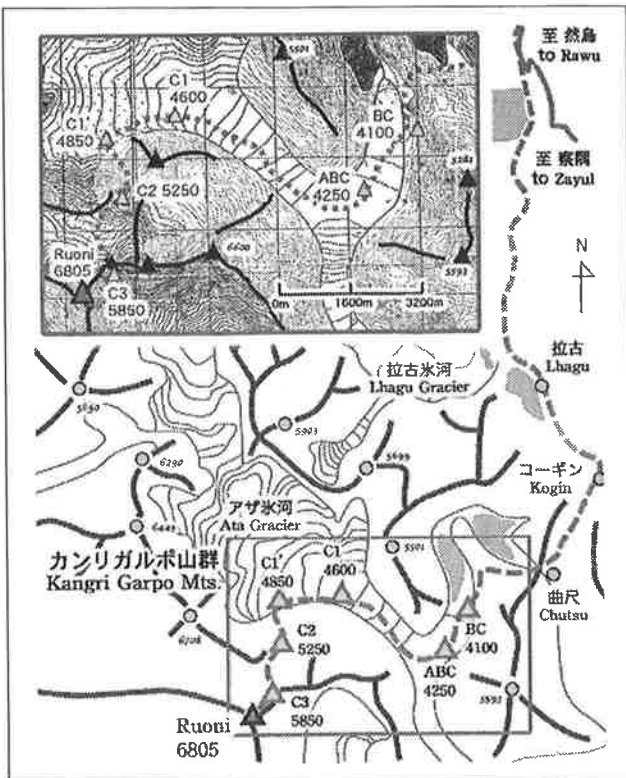
とんでもないことが起こった。新型肺炎 (SARS) が中国本土で猛威をふるい、〇三年四月中旬にはチベットへの外国隊はすべてしめだされた。荷物発送の八月末までに状況は好転するか、この気がかりなニュースのために準備のテンポはにぶり、新たな心配がふえた。しかし幸いなことに七月にはSARSは収まり、我々の心配は杞憂に終

わった。

### 登山経過

今回成都から千五百キロメートルを走ってBC入りをすることにした。これはラサからの道路は、往々にして崩壊して交通遮断になる危険性が多いからである。しかし今回は結果的にはラサからのほうが二日ほど早かった。

二〇〇三年十月二日、関空を出発する。遠征実現のよろこびが実感されるひとときである。ジープ、ミニバス、荷物車のコンボイで悪路を走り、十日、車が入る再奥の部落拉古着。ここで隊荷をヤク四一頭に積み替え、十一日に阿扎氷河のサイドモレーンのBC四千百mに到着した。



拉古の夫十五人を使ってABC四二五〇mまで荷揚げ。ここは阿扎氷河が南北にわかれる分岐点であり、南に流れる氷河を下りれば、インドとの国境に出る。ミャンマーの山が指呼の間に見えるテント地である。十四日クレバス帯をぬけてC1(四千六百m)を阿扎氷河の上部に建設した。登頂ルートは、この山を遠望したときにすぐわかる頂上から北東にのびている尾根にとることにきめていたが、この尾根の下部が不明であった。その下部は大きく切れ落ちていて、そのまゝは偵察隊の結果でも判明せず、未知のまま残っていた。

最初の作戦はC1から阿扎氷河側面の尾根をあがり、そこから再び緩くなった阿扎氷河においてコルにあがるというものであった。しかし尾根にあがるルートは雪崩の危険があり、度重なる偵察の結果、急峻な氷河のセラックを回避して氷河添いでルートが取れることが分かった。そしてこのルートから十月二十三日、待望のコルに到達した。

コル付近は広大な雪原になっており、そこからルオニイ本峰が屏風を立てたようにそそり立っている。しかし下部は垂直に近い岩壁

と雪壁、上部は巨大な雪のハングになっていて、そのつこしは雪の崩落などの危険性がある。ルート工作隊は懸命にルートを探ったが、天候にも恵まれずルートは見つからなかった。(添付写真で岩壁とハングが見える)

この山の特徴として、BCでは天気がいいのに、上部ではガスと風雪という天気がつくことである。十八日から九日間、C2以上では湿雪が降り続き、積雪量は優に1mを超え、氷河は雪崩の危険をはらんでいた。C2下部は傾斜が四十度くらいの斜面がつづき、退路の確保も問題であった。現に無人になっていたC1が雪で埋没し、それを探すのに一苦労するという場面もあった。いろいろな悪条件が重なり、二六日にこれ以上登攀を続けることは危険と判断し、登頂を断念した。

私は悪天のときはBCにいたが、天気がよくなってからC1まであがった。体は快調で、夢にまで見た神秘あふれるカンリガルポ山群の山々を見て至福のひとつきを過ごした。ちょうど七十二歳の誕生日であり、隊員はケーキとビールでお祝いしてくれた。

### おわりに

人工衛星が飛び交う現在、未知の世界はもはや残っていない、AACKはその行くべきところが無い、ということとはよくきかれる。私は前からその意見には反対であった(ニュースレター二四号)。現に今回行った地域は、全く前人未踏ですべては未知であり、氷河をとりまく山はすべて処女峰である。まだ探検的興味がある。そういう地域に入って、いま

まで誰も知らなかった山塊に接し、未知の氷河にルートを探る、という行為は我々の未知への探求心を十分満たしてくれる。たしかに人工衛星によって地図はできる。しかしその地図ではわからない三次元の世界に入ればそこに如何にすばらしい世界が展開するかが、今回の遠征であらためて感じた。私にとつてチョゴリザ、サルトロカソリ、シエルピカンリ、クーラカンリとつづく五回目の未踏峰挑戦であり、未知の世界の魅力を十分に満足できた。残念ながら五座目の処女峰登頂はできなかったが、全員無事に帰国できたことがなにより嬉しい。登山隊長も三回目を数えるが、山の選定、許可取得、組織作り、募金とすべて自らやってきた。苦労も大きかったが、得るところも大きかった。今後更なる挑戦もしたいが気力体力が続くかどうか。でも夢は持ちたい。

なお経費はひとり約百万円強ですんだ。許可取得から経費の交渉まで、献身的にお世話になった京都国際交流協会吉田興和氏に厚く感謝する。

## ウエストバットレスからの マッキンリー登頂

睦好 正治

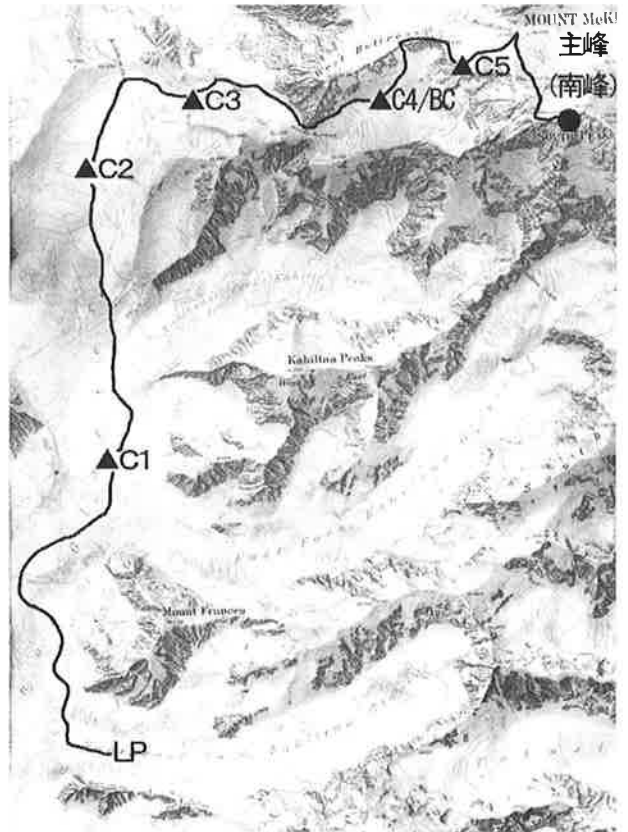
ウエストバットレスIIノーマルルートからのマッキンリー登山なんて、未知の要素もなく、年間千人以上もの登山者が訪れその半数

が登頂しているの、今さら記録として発表するような価値もないのだろうけど、この六月に行ってきたのでちよつと書いてみることにする。

今回のメンバーは、日本ヒマラヤ協会（以降、H A J）にひごろ出入りする山仲間です。隊長は、野沢井歩三九歳。バーバリアンクラブに所属し十回を越えるヒマラヤ登山経験があり、

H A Jの専務理事でもある。冬の間、富士山測候所へ歩荷をするいわゆる強力で生計をたてている。宮崎久夫は、五二歳。雪と岩の会に所属し、サトパント（七〇七五m）などの登頂経験のある木工大工。志村真由美は、一昨年私と一緒にアコンカグアを登っている。合せて四人だ。メンバーの経験には不安はない。

マッキンリーの登山適期は五月から六月で、天候が安定するのは六月だがクレバスが開き次第に危険度が増す。通常、ノーマルルートと呼ばれるウエストバットレスは、カルヒトナ氷河のカヒルトナ氷河南東フォークのランディング・ポイント（以下、LP）へエアタクシーと呼ばれる飛行機で移動し登山を

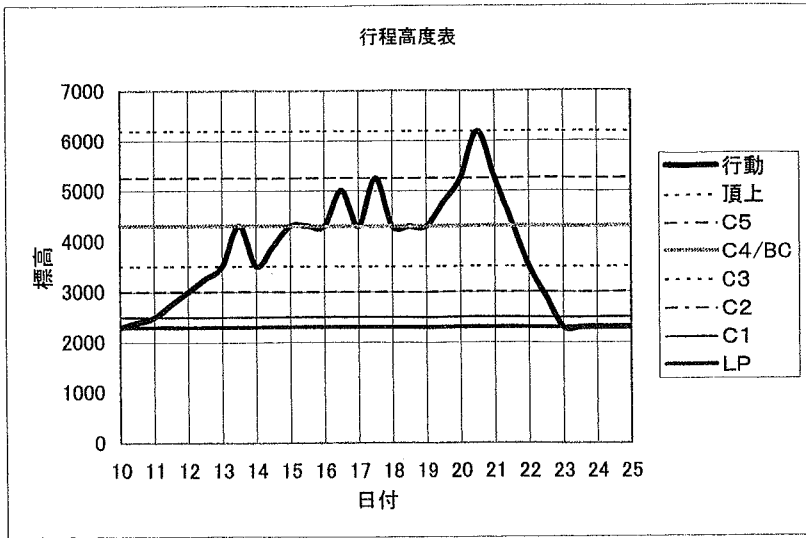


開始する。もしエアタクシーを使わないとすれば、まだ湿地帯や川が凍り、熊が冬眠している三月から四月のほうがよいらしい。

登山許可申請は至極簡単で、ホームページ (<http://www.nps.gov/>) から用紙を入手し必要事項を記入して郵送し、登録料のデポジット分二五USDはクレジットカードで支払った。丁寧なことに申請が受理されると登山の注意書が日本語で記されたパンフレットが送られてくる。エアタクシーの手配やアンカレッジ空港からの移動も全て、電子メールによるやりとりで済ますことができた。現地には五つのエアタクシー会社があるが、今回は経験者の情報をもとにK2Aviationという会社を選択した。

出発前に記録を読んだり経験者に話しを聞いたりしたが、みな異口同音に「とにかく寒い」と言う。凍傷経験者も多数いる。オーバーシューズは当然として、羽毛入のオーバー手袋なども必携だ。冬の八千m峰並の防寒具が必要なようだ。

日本出発は六月七日、入山日は十日、帰国は三十日とした。メンバの仕事のスケジュール上を勘案してこうなったのだが、天候が安定していること、ルートが出来上がっている



ること、先行パーティによって幕営地が既に整地されていることなども、その分の手抜きができることも期待していた。

七日の昼に日本を発ちソウル経由でアンカレッジに着いた。空港で半日時間をつぶしシヤトルを待った。タルキートナという小さな街が、登山のベースとなる。私たちは、成田から二四時間かかったが、時差があるおかげで七日の夕方には着いた。ここには、デナリ国立公園のレンジャーステーションがあり、入下山の際には必ず立ち寄りなければならない。小さい街で雑貨屋程度の店しかないが最低限の食料品や登山装備も揃う。

翌八日は、レンジャーステーションで入山の手続きを行う。登山ルート解説、国立公園内での諸注意、高山病対策などのレクチャーを受ける。装備や食糧の点検の際に、食糧は二週間分であることを告げると係官の顔が曇り、少なすぎると指摘されたが、全員ヒマラヤ登山の経験があることを確認するとオーケーがでた。ゴミの持ち帰りは当然だが、トイレのルールが厳しい。大も小もLPとC4では予め設営された場所、さらに大は、LPからC4間では各自に手渡される生物分解性のポリ袋、C4より上部では、パーティに一個渡されるバケツに用を足さなければならぬ。ポリ袋は各自でクレバスに投棄し、バケツはC4でレンジャーが回収してくれる。これは、環境に対する配慮というよりか、登山者の飲料水用の雪が汚染されるのを防止するためだ。

ついでに食糧計画にも触れておく。実は大

した工夫はしていない。フリーズドライはアタック前後に必要な分だけ用意しC4までは米を炊き生野菜を持参した。軽量化のため圧力釜を装備から省いたので、四三〇〇mで無洗米を炊くとパサパサして米特有の甘みが全く感じられないが、飽きずに食べられた。おかげで食費は非常に安くついたが、浮いた分は酒に消えてしまった。ほぼ毎日、ウイスキーのボトル一本分が空になる。酒の減り具合で各人の高所順応度がわかる。

十日、いよいよエアタクシーを使って入山する日だ。七人乗りの飛行機でリアシートを外して荷物を積みこむ。滑走路を離れるとしばらくは、星野道夫の写真的ような草原が広がっている。山のほうは天候が芳しくなく雲が立ちこめマッキンリーの姿は見えない。足元に氷河が見えてくると、雲の下限と氷河をまとった八ッ峰のような岩稜のコルがなす三角形をくぐりぬけたりする。あまり気持ちのいいものではない。エメラルドブルーのクレバスにできた小さな氷河湖が点在している。その上空を雪面への旋回し高度を下ると、氷河上の雪面にスムーズに着陸した。

荷物を飛行機から降すと小柄な日本人の男性が寄ってきた。野沢井と同じ会に属する笠見君という後輩らしい。彼は単独で許可をとってここにきているとのことだ。同志社大学出身で山岳同好会に所属していたそう。これからは彼とは同一行程で、よくテントに遊びにきてくれた。私は京都の話ができて楽しかった。

二三〇〇mのLPからC3までの氷河上の

アプローチは地形が平坦なこともあり、ソリが有効につかえる。LPには、無料貸出のソリが山積みにしてあり自由に使えるようになっている。荷物は一人五十キロほどあるので、背負う分とソリで引つ張る分を二分させるが、この按配は難しい。ソリを引くための紐を、背負っているザックのウエストベルトに結びつけると楽に牽引できる。スキーもパーティの足並みが揃っていればかなり有効で、半数程度の人が履いていた。京大出身者でメンバーを固めればスキーが有効に働くに違いない。我々はスキーが苦手な人もいるのでスノーシューを使用した。クレパス対策のため二人一組となりロープで結びあう。下のほうは気温も高く、雪ではなく雨が降るのには閉口した。緯度が高いため夜でも充分なヘッドランプ無しで行動できるほどの明るさがある、昼間の暑さをさげ、夜間行動するのも選択肢になるう。

十日は、二千五百mのC1。十一日は、3千mのC2。十二日は、三千五百mのC3に泊った。

一日の行動時間は約四時間。十三日にC3から四千三百mのC4(BC)を往復し、十四日にC4(BC)入りした。十三日は、ほとんど空身にもかかわらず身体が鈍重で苦しかったが、翌日はフル装備を背負って軽快に歩けた。高度に対してみるみる適応していく自分の身体の反応が頼もしい。

天気予報が、毎夜二十時に天気予報がCB無線で流れてくる。チャンネル十九(27.185MHz)の電波が受信できる無線機の

携帯が推奨されているのだが、このタイプの無線機は日本では合法的に入手できないため、タルキートナで百二十ドルも出して購入した。かろうじて日付とclearかcloudyといった単語が判別できる程度で、さっぱり何を言っているのか聞き取れない。そもそも、この天気予報自体があまり当たらない。

十四日、BCになるC4に近づくところからブルなテント村が目飛び込んできた。まるで、ゴルドンウィークの雷鳥沢のようだ。六月も中旬となれば、風除けのブロックの積まれた整地済みの場所がいくつもある。C4からC5へ上がるルート上にある急な雪面には、上り下りと別々に二本固定ロープが用意されている。人が数珠繋ぎになっている。数えてみると五十人近くいる。

C4には、気象観測隊できている大蔵喜福氏とアラスカ大学の学生たち、氏を支援する日本山岳会の一行が来ており挨拶を交わす。大蔵氏は、十二回目のマッキンリーだそうだが、他にも多くの日本人が来ている。それにしても、日本人の単独行者が多いのには驚かされる。単独行の場合、一般の申請とは別の様式で手続きをせねばならず、単独行の危険を回避するための方法についてレポートを提出しないと許可がおりない。

十五日はC4にて休養。テントの周囲の斜面に目をこらすとノーマルルートやメスナイクロアールの下部のあちこちにシユプールがある。スキー持ってきたら気持ちいいだろうなあ。C4からマッキンリーの本峰は、稜線の陰になつて見ることができない。そのかわ

り、フォーレイカー(五三〇四m)やハンタ(四四四二m)ハンチントン(三七三一m)を望むことができる。

十六日と一七日は、五千mの高度に慣れるために十六日はC5の手前まで、一七日は荷上も兼ねてC5を往復した。ルート上にある雪壁に張られた十ピッチほどのフィックスロープは常に行列ができている。地元のガイド会社主催するツアーなのだろうか、二十人ぐらいのグループが二つも先行していると遅くて待ちきれなくてイライラする。

十八日は、再度C4にて休養日とする。

十九日、アタック前日。C4からC5に上がる。寝袋等、個人装備一式を持つての行動だ。なんだかんだで二十キロ程度あるが、順調に順化が進んでいるのか、三日前より身体が軽く感じられる。一九八九年にこの山で遭難した山田昇の遺体は、ここC5の上部で発見されたのだが、どの辺りだか想像してみる。

C5でテントを設営しお茶を沸かして一息ついていると、外人のお姉さんが、英語が不自由なのか身振り手振りで鍋と燃料を貸してくれないかと言ってきた。なんでも下のキャンプに忘れてきたらしい。こちらも、装備に余裕が無いので丁寧にお断りする。しばらくすると、別のパーティから同様のことを日本語で頼まれる。愛知県から来ている最高齢登頂の男性パーティだ。あちこちのテントに頼み回っていたようだが、レンジャーに諭され翌日下のキャンプに降りたようだ。

二十日、アタック日。八時に出発。羽毛服やオーバーシューズも身につける。快晴で風



も弱くそれほど寒くないので、羽毛の手袋は必要に感じたらはめることにしザックの中にした。デナリパスへのトラバースは、同じ姿勢が続く、途中で休憩することもできず足首が痛くなる。トレースはしつかりしているものの、日陰のせいかわき溜まったが不安定で決まらずいやらしい。デナリパスで陽がさしはじめ、ようやく身体が温まってくる。デナリパスのすぐ上に設置された日本山岳会の気象観測装置は思ったより小さなものだった。

空身に近いとはいえ、初めて獲得する高度だと、走って登るような無理は効かない。じれたさを感じながら一歩一歩高さを稼ぐ。雪質は適度にクラストしており歩きやすいほうだ。フットボール場とよばれる雪原を横断すると、頂上稜線へあがる斜面が目に入る。高度の影響か、非常に眠い。時々自分のロープを踏んでしまう。前を歩いている真由美ちゃんも同じような感じで、時々ロープが弛んでいる。

白馬主稜のような頂上稜線は南側が切れ込んでおり、雪庇をうまくさけてルートがつけられている。

十四時、周囲を見渡しこれ以上高いところが無い場所について。頂上のような。眼下には雲海が広がり、自分たちがいる頂上稜線以外の大きな山塊は見えない。フォーレイカーも雲の下なのだろう。

先行者に一人の日本人男性がいた。彼は昨日、頂上に立ったつもりだったが、後で頂上稜線に上がったところで引き返してしまった

ことがわかり、もう一度上がってきたとのことだ。

風もほとんどなく薄日の差す頂上はなんとも穏やかだった。野沢井隊長は、やおらハーネスを外し、お尻を丸出しにして人の記念写真に乱入してくる。いい年して何してるのかと思うが、マッキンリーは寒いと言った連中にお尻が出るほど暖かかったと証拠付で言っていることらしい。

走り下るように下り、C5に戻ったのは十六時二十分だった。テレビカメラを構えたレンジャーの取材班からインタビュウを受ける。往復八時間台なら、かなり強いパーティーだと言われちよつと嬉しかった。

あとは下山するのみ。翌二十一日はC3まで、翌々日二十二日の夕方にはLPまで戻ることができた。そのときは飛行機の往来があり、今日中にタルキートナに戻りビールで乾杯できることを期待し、LPマネージャに帰りの便の手配を頼む。小一時間ほどして、もらえた返事は「今日は、天気が良いK2Aviationのパイロットの労働時間が八時間を越えたため、連峰航空法の制限で本日のフライトは終了」とのこと。他のエアタクシー会社の飛行機はまだ飛んでいるのに悔しい。急がなくなるともあしたは帰れるさ。その晩は、ありつたけの食糧を喰いつくした。

二十三日、さあ今日はタルキートナでビールだ。朝六時フォーレイカーが朝焼けに輝いている。ところが、九時にフライトスケジュールを確認しようとした頃には、どんよりガスにつつまれ視界が効かない。全く飛んでく

る気配がない。残った食料でひもじさをまぎらわせ時間をつぶす。結局フライトは二四日の夕方になった。ここまで飛行機が使えるのだから少々重くとも食糧やビールをLPにデポしておくべきだった。

今回の登山はさほど消耗した感覚は無いのだが、山から下りてしばらくは飢餓状態で、分厚いステーキ肉を買っては毎日バーベキューをして体力の回復をはかる。アンカレッジの滞在費が心配だったが、一泊十六ドルのホテルを紹介してもらい経済的に助かった。

薬物の使用についてだが、私は今回もダイヤモンドは服用しなかった。ビタミン剤は毎日欠かさず服用した。指先の割れの防止に、ビタミン剤は効果があると思う。また、高所登山にきて初めて下痢をしなかった。これは、周囲に家畜等がまったくおらず、人糞も管理された状態にあり、衛生な状態を保てたのが良かったからかもしれない。

総費用は、日本からの往復の航空券や登山料など、一人あたり二十一万だった。酒を節約すれば、目標の二十万切れたかもしれないが、それは無理な相談だ。

ウエストバットレスは、北米大陸最高峰でもあり人が多いことで気疲れするのが欠点だ。その分、多数の資料がありルートも整備されているため、高度順応に専念できる。また、アコンカグアと違い、二千三百mの歩きはじめから雪上生活を強いられ、水河歩きが経験できるところもよい。大学山岳部の合宿をこの山でしている記録をみかけるが、ヒマラヤのプレ合宿としては適当なところかもしれ

れない。また、マッキンリー以外のフオーレイカーなどの山は、その秀逸な麗容にもかかわらず、年間十数人と登山者が少ない。マッキンリーのバリエーションルートも人が少なく、静かな登攀を求めてもつと目を向けてもよいかもしれない。

マッキンリー登山の後、野沢井はベトナムの最高峰ファンシーパン（三二四三m）、志村はイエティ捜索隊に参加しネパールにでかけてしまった。世間のしがらみがないのか、この人たちのフットワークの軽さは、尊敬を通り越してただただ呆れるばかりである。

さらに野沢井は、ネパールのヒムルンヒマール（七一二六m）に挑戦したが、十月二日に雪崩遭難し、帰らぬ人となってしまった。彼と二度と陽気な登山ができないかと思うと残念である。

## 憧れのジョン・ミュアー・トレイルを歩く

阪本 公一

八月三日に日本を出発して、米国シエラネバダ山脈のジョン・ミュアー・トレイルを歩いてきました。同行者は、京大山岳部一九六〇年同期入部の堀内コンゴさん、京都山岳会の宮川清明さん、山城高校山岳部同級生の八太幸行さんと私の六三歳の同年生四人。

ジョン・ミュアー・トレイルは、シエラネバダの自然を愛し、自然保護者の先駆者とし

て米国の国立公園の設立を提唱した初代シエラクラブ会長のジョン・ミュアーを記念して作られたトレイルです。ヨセミテから米国最高峰のマウント・ホイットニー迄連なる三〇キロメートルのロング・トレイルで、世界のバックパッカーの憧れのトレイルと言われています。

日本アルプスのように食事付きで泊めてくれるような山小屋は全く無く、すべての食糧とテントを担いでのワイルダネスの旅となります。体力のない我々年寄り部隊は、ヨセミテより三分の一度程度の約百二十キロメートルを十一日間かけてゆつくり歩いてきました。それでも、ヨセミテを出発したときには、一人当たり二二〜二四キロの荷物になりました。

ジョン・ミュアー・トレイルは、ピーク・ハンティングが目的のトレイルではなく、シエラネバダ山脈の岩山に囲まれたエメラルド色の素晴らしく美しい湖と高山植物の咲き乱れるメドローを巡る実に楽しい山道です。峠を越えるたびに異なる景観が我々を陶醉させ、澄み切った水をたたえる湖や谷川には人ずれしないレインボー・トラウト、ブルック・トラウト、ブラウン・トラウトが入れ食いの状態で泳ぎ廻っていました。

人間はおそわれないが、食糧をねらってテント場にやってくるブラック・ベアーが、シエラネバダ山脈のバックパッキングで一番の敵です。我々も、カウンター・バランスで松の大木の枝につるして置いた食糧袋をおそう黒熊に遭遇しました。幸いと食糧袋に付けて

おいた、ネパールで買ったヤク用のベルが役立ち、真夜中にヤク・ベルの音に目ざまされて、ホイッスルを吹いたり、大声で怒鳴りながら小石を投げて、黒熊を撃退することが出来ました。

シエラネバダ山中の川・湖の水は、ジアルディア・ランブリアと言う微生物があり、そのまま飲むと人間の腸に取り付き、下痢、食欲不振や腹部の痙攣やむくみが出ると言われているので、我々も忠告通り浄水器を使って水を濾過して飲料水としました。

雪の多い年は八月でも峠越えが大変と言われ、又谷川の渡渉が危険と言われているので、我々も六本爪のアイゼンや、渡渉用の六ミリロープやカラビナ、シュリング等も用意していましたが、今年は例年になく雪が少なかったのか、全く使用する機会はありませんでした。それにしても、シエラネバダの山々を歩いている十一日間は、毎日紺碧の青空続きの晴天で、今回は雨具は一度も使用しませんでした。更に、精神的にもうんざりすると、言われている蚊やブヨも悩まされることなく、持参したモスキート・ネットや蚊取り線香のお世話になることも全く無かったのは、幸運と言えましょう。

日本の縦走も楽しいですが、日本には無い雄大なスケールのシエラネバダ山脈のワイルダネスの旅は、最高に楽しく素晴らしいものでした。又、私達が十一日間歩いたシエラネバダの山々には、ビールの空き缶などは勿論の事キャンデリーの包装紙一つ落ちていない清潔な状態なのは感心させられました。

ネパール・ヒマラヤやカラコルムの山旅も楽しいですが、それとは違った山旅の魅力がアメリカのシェラネバダに有る事を初めて知った旅でした。

## 「行程記録」

八月三日 関空発、一四時五五分、サンフランシスコ着、八時五五分。フィシャーマン・ワーフのYHに投宿。

八月四日 バークリーのREIにて、プリムス・ガスボンベ、ホワイト・ガソリン、蚊よけリペレント、無公害石鹸等購入。

八月五日 サンフランシスコよりマージェードにレンタカーにて移動。YH宿泊。

八月六日 マージェードよりバスにてヨセミテへ。予約なしで泊まれるクライマー用のサニーサイド・キャンプ場に宿泊。

八月七日 グレーシャーポイント、ヨセミテ滝、ハーフ・ドーム等見学。

八月八日 エルキャピタン、キャティドラル、センチネルの岩壁を巡り岩登りを眺める。

八月九日 ヨセミテを七時四五分出発し、いよいよジョン・ミュアー・トレイルへのバックパッキング。ネバダ滝までの急登も、それほど苦勞なく登り切り、レッド・パインの森の中のリトル・ヨセミテにて幕営一二時三〇分。ベアー・ボックス有り。

八月一〇日 五時三〇分リトルヨセミテ出発。マウント・ホイットニーから歩いて来たと言う五〇代と三〇代と思われる女性二名に出合う。今日で三二日目で、ヨセミテ迄の

全行程三四〇キロメートルを完踏すると喜びにあふれた笑顔が美しかった。一二時三〇分サンライズCSに幕営。ベアー・ボックス有り。

八月一日 五時三〇分出発、エコーピークの下のメドローに咲き乱れる紫のルピナスの花に感激。一〇時を過ぎると直射日光が照りつけ、歩くペースがガクッと落ちる。一二時五〇分トルミュー・メドウのバックパッカー用キャンプサイトに設営。ベアー・ボックス有り。

八月二日 五時三五分出発。ライエル溪谷のメドローに幕営十一時。阪本魚釣りに出かけ、一五〜二センチのブルック・トラウト一匹の収穫。焚き火にて塩焼き。

八月三日 六時四〇分出発。三二五四mのドナヒュー峠を越える。岩山が三六〇度に渡り連なる広大な風景。心配していたラッシュ・クリークの渡渉も飛び石づたいにわたれ一安心。シェラネバダで最も美しい湖と言われるサザラン・アイランド・レイクのほとり幕営一七時。夜、カウンター・バランスの食糧袋をねらってブラック・ベアーが現れた。

八月四日 本日は休養日の予定だったが、余り快適なテント地でもなく且つ黒熊が心配なので、近くのルビー・レイク迄移動することに。八時一〇分出発、ルビー・レイク一〇時三〇分。一一時四〇分コンゴ氏と下の谷へ鱒釣りに出かけ、一五時五分帰幕。三三センチ、三二センチ、二七センチのレイ

ンボ・トラウト三匹、一八〜二七センチのブルック・トラウト六匹。新鮮な鱒の塩焼きは美味なり。緑の湖の快適なテント場だった。八月五日 六時二〇分出発、一二時三五分グラデイズ・レイク着。小さな湖だが気持ちの良い幕営地。

八月六日 五時五三分出発、一〇時三五分レッド・メドロー着。バックパッカー用のキャンプサイトに幕営。ベアー・ボックス有り。ここはキャンプ用に開発された場所、シャトルバスも走っている。近くのレッドメドウ・リゾートへ食糧の買い出しに出かけた。近くの温泉から取り入れたホットシャワーが嬉しい。

八月七日 五時七分出発、一四時ダッククリーク着。松林の中の快適なテント地に幕営。三七センチレインボ・トラウト一匹、一五〜一八センチブルック・トラウト五匹の釣果

八月八日 六時三五分出発、火山湖のダック・レイクへ登り、更に標高二百m程登ってダック・パスを越えてマンモス・レイクの方へ下る。美しいアロウヘッド・レイクのほとりに幕営。アロウヘッドと上流のスケルトン・レイクを結ぶ谷へ釣りに出かける。ブルック・トラウト一八匹の塩焼きに堪能した。そろそろ鱒の塩焼きにも、みんな厭きてきたようだ。

八月九日 七時五〇分出発、一三時マンモス時レイクのモーターに投宿。マンモス・レイクはカリファオルニアで一番大きなスキー・リゾートと言われており、何でも高



lland Passの近くの夢のような庭園



Banner Peak 3,945mとThousand lland Lake

## オツルミズ沢

高尾 文雄

日程：二〇〇三年十月十一日～十三日

メンバー 高尾文雄 (JAC、AACK)、  
尾形達也 (大阪市大山岳部OB)、森 啓  
(JAC青年部)

### 行動記録

十月十日 (金) 夜～十月十一日 (土) 天

気 晴

浦佐 (仮眠・朝食) 六時一五分～六時三十分  
水無キャンプ場六時四五分～七時入渓点七  
時三分～十一時十一分サナギ滝下十一時二  
五分～十三時二五分サナギ滝上十三時四十分  
～一五時四十分大滝下～一七時十分大滝中段  
テラス BP

十月十二日 (日) 天気 雨のち晴れ

大滝中段テラス七時四十分～八時三十分大  
滝上八時五十分～十四時五十分二俣一五時～  
一五時三五分駒ノ小屋 (頂上往復) BP

十月十三日 (月) 天気 雨一時強く

駒ノ小屋六時九分～九時五分駒ノ湯十一時  
～十一時三十分浦佐

オツルミズはまさに天から水が落ちてくる  
ような激しく急な沢だ。以前、八海山から見  
たオツルミズは出合から駒ヶ岳に向かい一直  
線に突き上げる滑り台のような沢に見えた。  
出合からすぐに滝の連続で、大小取り混ぜて  
飽きることなく源流まで続いている。

かった。モーター一泊US七〇ドル (二人部  
屋)

八月二〇日 マンモス・レイクにて休  
養。コイン・ロンドリーにて洗濯したり昼寝  
したり。

八月二一日 七時五〇分発バスにてリノ  
へ。シニア料金バス代US一八・五〇ドル。  
リノ空港着一時四五分。レンタカーを借り、  
アメリカで最も透明度が高いと言われるレイ  
ク・タホへ。タホ市のトラベル・ロッジに投  
宿。一泊US百ドル (二人部屋)。

八月二二日 七時四〇分出発、プレー  
ス・ヴィレの古い金鉱街を見学後、サクラメ

ントのトラベル・ロッジに投宿一三時三〇  
分。サクラメント市内見学。

八月二三日 七時四〇分出発、サンフラ  
ンシスコに入る前に、ミューア・ウッズ・ナ  
ショナル・モニュメントを見学、ミル・ヴァ  
リーの街を訪れた後フィシャーマン・ワーフ  
のユースホステルに投宿。

八月二四日 サンフランシスコ市内見学。

八月二五日 サンフランシスコ市内見学。

八月二六日 サンフランシスコ一三時一

五分発UA便で大阪へ。

八月二七日 一五時五分関空着。

去年は北沢と一緒に行った森君と帰り道で次はオツルミズと決めていたが、今年も頼もしいメンバーが一人増えた。その尾形君と沢と一緒に行くのは十五年ぶりくらいのご無沙汰である。

終わって去年の北沢と比べると様子がずいぶんと違っていた。ゴルジュは浅く、中流部からは兩岸の傾斜も緩い。沢の中は大変明るく、兩岸の稜線が低く、すぐ間近にある。ただ、沢自体の傾斜は大変きつい。とてもきれいな紅葉が山々を彩り素晴らしかったのは去年と変わりなかった。

この沢は岩登りの要素が強いが、ハーケンが入るリスに乏しく、ブレイポイントが見つけにくい。それで三級程度の岩登りであればノーザイルで登れる人でないと苦しい。

浦佐からタクシーでキャンプ場まで入った。最近上流で土砂崩れがあつて通行止めだそう。キャンプ場から林道を歩くとすぐにオツルミズが見えた。すでにカグラの滝がはつきり見えている。出合まで行くと見上げた先にサナギの滝が見えた。すごい威圧感だ。出合で登攀のすべての準備をして入渓した。

すぐに登れない滝が出て左岸を巻く。しばらく行くと降りられなくなつてアップザイルン。右岸に渡ったところでまた高巻き。またアップザイルン。降りたところがカグラ滝の下である。カグラ滝八十mは左岸を登る。途中でザイルを二ピッチ張った。(トップは尾形、森) 先行の五人パーティがいて時間待ちとなつた。

サナギ滝はすぐ上に見えるのだが、取り付

きまで滝の連続である。素晴らしい連爆帯である。水流からあまり離れずに登る。五段200mのサナギ滝は右岸から取り付く。下部を巻き気味に登ってから水流に向かってトラバースする。次第に高度感が出て、ノーザイルでは怖いところだ。テラスがありそこから本格的な登攀となる。最初のピッチ(トップは森)は出だしの数mだけが難しくて後はやさしい。次のピッチが素晴らしかった。尾形トップで立った凹角をクラックに沿って登る。ピンがたくさんあり助かったが、ほとんど岩登りの世界であつた(Ⅳ-A0くらい)。

終了点がサナギ滝の落ち口であつた。見下ろすとまだ水無川の出合いがすぐ真下に見えた。

その後も滝が続く、釜を泳いだり、浸かつたりしながらしばらく行く。どうしても行けなくなり、右岸を高巻き。小さく巻くつもりが、草付きのためにブッシュを追い求めて、どうしても高みへ追い上げられる。ブッシュまで行くと今度は急斜面でなかなか降りられない。

いく段にもなつて落ちる大滝が目前に迫り、斜めアップザイルンで滝をパスして降りた。大滝は傾斜が緩く見えたので、半ばから右岸が登れそうだが、下部は手前から右岸を回り込むように登り落ち口へトラバースする。これが悪く途中からアンザイルンするが、大変時間がかかり、暗くなつてしまった。終了点の広い岩棚で寝ることとした。ツェルトを無理やり張り、何とか3人入り込み夕食の準備をした。寝るときは尾形が外へ出たが、夜中から雨が降りだし、狭くでこぼこで傾い

ているツェルトの中でひしめき合つて寝た。朝になつても雨は止まず、小雨の中を出発した。右岸のルンゼ状を尾形トップでブッシュまで登り、今度は森がトップで水流に向かってブッシュとスラブのコンタクトをトラバースした。ちょうど大滝の落ち口へ出られた。大滝を越えると兩岸の傾斜は緩くなり、稜線も間近に見えてきた。ほんのしばらく平和に遡行できたが、すぐに登れない滝に出くわす。右岸を小さく巻くつもりが、先を見ると滝が続いていて、どんどん追い上げられる。登れるかどうか不安に駆られるので、アップザイルンも出来ない。しばらく行くとルンゼが入つていてそれを利用して半ば強引に沢へ降りた。もつと小さく巻くべきであつたのだろう。

滝を登つたり、草付をごまかしながら小さく巻いたりして行くと、水が冷たくなりガスがわいている。大きな雪渓に出くわした。右岸から簡単に上へ上がったので、上を進む。先端は崩壊しており右岸に乗り移り高巻く。沢が左に曲がりすぐに右に曲がるところに多段の滝があり登れない。そのまま草付を長いトラバースをして高巻き。最後はブッシュ帯のコンタクトまで上がり、支尾根を越えてアップザイルンで沢に戻つた。

その後も滝はどんどん続き、一度高巻いて滝頭の上を斜めにアップザイルンした以外はしぶと登れるか、へつりて突破できた。水量が少なく、切れ込みも浅くなつたのにもかかわらず、背が届きそうもないくらい釜が深い。いつの間にか天気は好転し、晴れ間も出

てきた。次第に沢は源流部のやさしく、美しい溪相を呈してきた。滑滝が現れはじめ、紅葉のこのコントラストが素晴らしい。

二股を左に取るとまもなく駒ノ小屋の直下に出た。そこは小屋の水場になっていて沢を離れて道を行とすぐに駒ノ小屋に出た。ザックを置いて駒ヶ岳を往復し、紅葉が真っ盛りの越後三山の夕暮れをゆつくりと楽しんだ。

翌日は早起きし、途中激しくなった雨の中を駒ノ湯へ向かって下った。ゆつくりとお湯に浸かり厳しかった今回の遡行を思い返した。タクシーで浦佐へ出て、連休の混雑に合わないよう早めに帰宅した。

## 追悼

### 「さようなら」藤平

舟橋 明賢

風の強い日には「風が語りかけるままに」、君との憶い出を手繰り出しながら過ごそうと思う。

京都大学旅行部ルームでの出会いから永遠の訣れの日までの五九年に亘る歲月、西部構内のルームで芽生えた彼との友情は、それぞれの人生の転変につれて、時には淡く、時には濃く、その色合いを変えて織り

なしながら深まって行ったように思う。

彼と一緒に登った山の数は少ないが、互いを知り合うには充分な時間があったし、また濃厚な密度があった山行だったと思う、そしてその間を点綴しつつ補填しながら続いてきた夜の巷での交友。

長い歲月の経過とともに暖めあいながら育て上げてきた彼との友情に纏わる数々の憶い出は、ひよつとすると、相手のことを想った時に何時でも手繰り出されるのを待っているような、お互いにとつて極めて濃密でも貴い重みを持つ少数の憶い出に捨象され集約されてしまっているのではないだろうか。

私にとつてのそれは学生時代の「春の池の谷」と一九五三年の「アンナプルナ」に色濃く集約されてしまう。

そしてこれからも、春浅い剣岳の頂上直下で氷片を叩きつけた烈しい風のことを、

そしてまた、アンナプルナに突如として襲いかかって来た凄まじい冬の嵐のことを、憶い出しながら、

彼が「風に語らしめたかった」ことについて想うだろう……。

彼との訣れの時が来ることはこの世に生まれ合わせた宿縁として、それなりの心の準備」をしてきたつもりだったのだが、

いざその時を迎えた今、私独りがこの世に置き去りにされたような、言い表しよう

のない寂しさと虚ろさを感じてうろたえている。

長い間の友情、本当に有り難う。ただただ、冥福を祈る。

### 藤平さんを悼む

平井 一正

藤平さんの訃報を聞いたのは〇三年十一月二十三日早朝のことであった。六月にお見舞いにあがったとき、まさかあと半年で永久のお別れになるとは誰が予想したであろうか。五十年近く山や下界でお世話になった多くのことが思い出され、悲しみに言葉がなかつた。

藤平さんが戦後の山岳界をリードする先駆的役割を果たしたことは改めて言うまでもない。富山高校時代から剣岳の開拓者として、兄彬文さんとともに名前はつとに有名であった。京大に進学した当時は、戦後の混乱期で山岳部は存在せず、その再建に尽力された。そのような環境の中で、林、伊藤、舟橋さんらとヒマラヤへの夢を語り、当時すでにカンチェンジュンガの登頂ルートを研究していた。のちにそれはエバンスルートとなったものである。一九五三年秋の今西寿雄さんを隊長とするAACK初のアンナプルナ遠征では、七千百mにはった

テントが烈風のために破れ、今西隊長と藤平さんが壮絶な退却の結果、見事に生還された。藤平さんからそのときの話を聞くと、びに畏敬の念に駆られ、大きな刺激を受けた。(ビデオ「ヒマラヤへの道」にも収録)。

このとき凍傷で右手中指の先と左の耳たぶを失っているが、それによって山への情熱が失われることはなかった。

アンナプルナから五年後、一九五八年のAACKチヨゴリザ遠征では、藤平さんは見事に七六五四mの頂上に立つた。私はそのときの幸運なパートナーであった。藤平さんは当時三十三歳、若手の先頭にたち、グイグイと隊を引っ張って行った。ぐずぐずしていたらすぐ叱責がとんだ。藤平さんはご自分の役目を十分認識しておられ、鬼の藤平ともいわれても隊の牽引車に徹した。幸い私は藤平さんとはよく呼吸もあい、パートナーとして合格した。十二時間以上にもなるラッセルを終え、やっと登頂に成功したとき、夕日に輝く頂上の岩の横で、頬を涙でぬらした藤平さんの笑顔を忘れることはできない。頂上からの帰り、吸い込まれそうな真つ暗な急斜面を、無限とも思われる確保の連続で下ったが、文字通り生死をかけた山行きであった。藤平さんの剛毅果敢な決断、沈着冷静な判断、大きな包容力に何度助けられたことだろう。そういう関係で藤平さんとは限らない信頼で結ばれた絆があり、通い合うものがあつた。

藤平さんはその後AACKの遠征計画には参加されていないが、一九七二年から約二九年間、富山県山岳連盟会長をつとめ、ナンガバルバットなど数々の遠征を富山県から出された。また一九九三年から二年間は日本山岳会長となり、その間一九九五年には日本山岳会マカール登山隊の総隊長をつとめられるなど、日本の登山界の発展に大きく貢献された。

藤平さんは、一九八三年冒の大手術をされた。林さんが沈痛な声で電話でしらせてくれた。この手術の経過はよかつたが、その後たびたび入院手術された。長年病と闘ってこられた人とは思えない活動に藤平さんの精神力と体力に頭のさがる思いがする。

毎年夏に開かれるアンチヨコ会(アンナプルナチヨゴリザ会)や、祇園でのAACKシニアの新年会などで何度も顔を合わせているが、「山とは自分の人生観の根底を成しているもの」と言い切つた藤平さんの、山への深い愛情と執着心、さらに山への変わらぬ情熱に常に共感と感動を覚えた。AACKの先輩連中の中でも藤平さんは生粋の登山家であり、また博識の文化人でもあつた。こんなすばらしい山の先輩とめぐりあつたことを感謝したい。藤平さんのご冥福を心から祈る。

## 梅里雪山峰の二〇〇三年 収容作業報告

一九九八年から始まつた明永氷河における遭難隊の収容作業は今年で六年目になります。最初の四年間は、標高三六〇〇〜三七〇〇メートル付近の緩傾斜帯で定期的なパトロールなど行い、多くの遺体と遺品が収容されました。その後、下部のセラック帯に移動し、昨年は三四〇〇メートルのセラック帯で見つかり、今年はさらにその下の緩い氷河上で、また新たに遺体と遺品が収容されました。以下、今年の現地作業にあつた小林尚礼会員から受けた報告にもとづいてお知らせいたします。

昨年からは村民の協力による現地パトロールを状況に合わせて減らし、時々、氷河の様子を地元の明永村村長に電話で問い合わせていましたが、今年の九月十一日に「九月十日、標高三一〇〇メートルの氷河上で地元民が遺品を発見した」との報告を受けました。発見されたものは村長の指示でその翌日に住民の手で収容され、氷河上に安置されました。その後、所用で中国へ行く予定の小林会員が明永村へ立ち寄り、現場の搜索と遺品の調査などを行いました。

小林が氷河を調査したのは一〇月一日、十一月八日の二回で、村民の協力を得て、スナツリ隊員の遺体と二五〇キロ近くの遺品を収容しました。十一月十九日にすべてのものを収容し、十一月二十六日に下関の火葬場に

て遺体を茶毘に付し、遺品の確認などを行いました。スナツリ隊員の遺骨は夫人の元に戻りました。また、他にも小さな遺骨などが見つかりましたがこれは身元が分からないのでまとめて火葬して日本に持ち帰りました。遺灰はこれまでのものとまとめていざれば比叡山へ納める予定です。十一月二九日に小林が帰国し、持ち主が日本隊員と判明した遺品を家族へお返ししました。

これまでに遺体の身元を確認できたのは十六人で、清水久信隊員だけがまだですが、身元不明の遺体もかなり見つかったことから、全員の遺体が既に収容されている可能性は高いと考えられます。しかし、今年もかなりの遺品などが見つかりましたので、まだ来年も収容作業を続けることになりそうです。

今年、収容した場所は氷河のかなり末端に近づいてきました。氷河左岸にある観光用の展望台とそこへの遊歩道のすぐ横に位置しています。昨年、下部セラック帯に入ってから移動が速くなり、セラック帯上部で落としたピッケルが二年後の今年に水平距離一二〇〇m、高度差五〇〇mの位置で見つかっています。これは氷河の流動だけでは考えにくい速さで、崩落などで移動した可能性もあり、遺品の範囲が広がっている可能性も考えられます。今年の発見位置から末端までの距離は目視で五〇〇m〜千mで、そこから先は急流の川になるため収容作業は困難になります。

遺品がかなり氷河下部へ流れてきたのと、明永村が観光地として急速に拓けてきたため、住民だけでなく観光客などの目に触れる

可能性が高くなってきました。今年是中国人探検家が氷河で遺品や遺体を拾い、インターネット上で写真を公開したのを地元新聞と日本の一部マスコミがとりあげることになりました。雲南省体育局関係者らと連絡を取り、これらが登山隊関係者の元へ返されるように努力しているところです。

(事務局 吹田啓一郎)

## 訃報

## 編集後記

上尾前会長より、突然ニュースレター編集役のご指名をうけ、巧く辞退する文句も浮か

ばず、全く知識も経験もなく、ウロウロしているうちに、押し切られた次第です。

誠に頼りない編集者ではありますが、どうかよろしくお願い致します。

五年程前より、卒業以来忘れていた山登りを再開しました。比較的若い年代の会員や、他の山岳団体の人々と交流し、山行を共にしその報告や計画を聞くにつけ、皆さんが如何に真摯に、意欲的に、継続して活動されているかを知り、新たな山行への刺激を受けました。

AACK会員は、社会のあらゆる分野で活躍しておられ多士済々です。どうか気楽にこのニュースレターにご寄稿頂き、会員相互に刺激し合うことで、個々人の新たな活動のエネルギーとなり、ひいては、会活動のためになればと念じております。

国内外の山行報告は勿論、研究分野のエッセー、旅行記等々何でも結構です。どうかどしどしご投稿お願い致します。

次号の原稿締切日は四月一〇日、発行は五月中旬の予定です。

(田中昌一郎記)

編集委員 田中昌一郎

発行日 二〇〇四年一月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒611-0022 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株) 土倉事務所